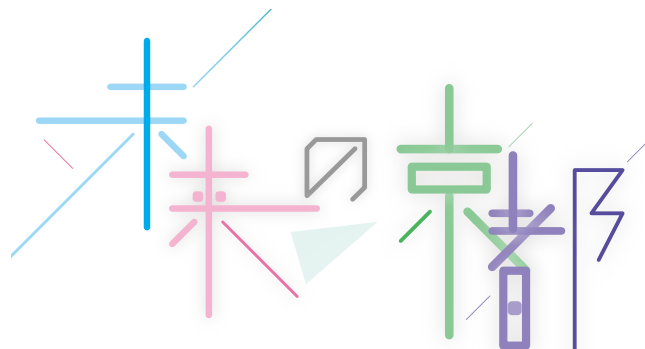


2024年 第1回 未来の京都 建築デザインコンペ 結果発表



FUTURE KYOTO ARCHITECTURE DESIGN COMPETITION

建築デザインコンペ 2024

京都の未来を切り開き、元気にする建築のアイデア募集!

京 都は平安遷都以前から、常に最先端の文化、芸術、技術の水準を保ち、新しいものを産みだし続け、同時にその伝統を保持してきました。歴史的には、新たな文学、宗教、工芸、絵画、織物、焼き物を産みだし、現代ではIT産業、精密機械などの最先端技術、ゲームやアニメなどの文化を産みだしています。

これからの京都の未来は、これらの伝統を保持しつつ、新たに生み出される、これまでにない一歩を踏み出した先にあります。新たな何かを産みだすためには、人と人との関係、人と自然や環境との関係を考え直すことがヒントになるかもしれません。

見たことのない未来に向けて、新たな何か、新しい世界を生み出す、建築、都市計画、まちづくりのアイデアを募集します!

審査委員

委員長 平田 晃久 (平田晃久建築設計事務所/京都大学教授)

委員 松本 尚子 (木村松本建築設計事務所/京都芸術大学環境デザイン学科 准教授)

委員 木村 淳子 (STUDIO RAKKORA ARCHITECTS/京都芸術大学専任講師)

委員 上野 浩也 (一般社団法人 日本建築士事務所協会 会長 / 一般社団法人 京都府建築士事務所協会 会長)

応募締切

令和7年(2025)2月14日◎ 必着

提出物

1.プレゼンシート

用紙の大きさはA2判(420mm×594mm)1枚(縦使い)。パネルなど、巻けないものは不可とし、着色など表現上の制約はありません。無記名とし、個人を特定するもの、目印等も記入しないこと。筒状にして、事務局あてに郵送してください。

2.応募票

Web サイトから専用の応募票をダウンロードし、必要事項を記入の上、プレゼンシートの裏面に貼り提出してください。

3.デジタルデータ

プレゼンシートのPDF形式の画像データをメールに添付し、応募者の氏名、又は団体名を記入のうえ以下の専用アドレスアドレスに送信してください。

応募用専用アドレス mirai@kyoto-kenchiku.com

提案条件

想定する敷地は京都府内とし、各自設定するが、具体的な場所を特定する必要はなく、用途、規模、法規、構造、設備、敷地の所有権などの制約は設けません。既発表、未発表を問いません。また、実作・計画案のいずれも応募可能です。

応募資格

建築士事務所、建築士、建築について学ぶ学生等。個人、及びグループ。

表彰

大賞: 1点、優秀賞: 2点、佳作: 3点、奨励賞: 若干名
受賞者には賞状、及び記念品を授与します。
発表: 令和7年(2025)3月末

表彰式

令和7年(2025)5月29日(木) 17:00~/リーガロイヤルホテル京都

その他

本設計競技の応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、発表する権利は主催者が保有するものとします。(主催者、及び共催者の広告、機関紙、ウェブサイト、その他の印刷物などへの掲載を含む。)

提出先・問い合わせ先

一般社団法人京都府建築士事務所協会

〒603-8163 京都市北区小山大野町1番地 紫明会館1階

TEL 075-334-5277 FAX 075-334-5377

E-mail kyotokai@kyoto-kenchiku.com

主 催: 一般社団法人 京都府建築士事務所協会

共 催: 一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会



募集
テーマ

新しい世界のうまれるところ

主催: 京都府建築士事務所協会

*日事連の「令和6年度単位会組織強化支援制度」の支援を受けています。

未来の京都 建築デザインコンペ2024

大賞：つなぐ浸透帯

菊地佑磨、伊藤光佑、青木麻緒

(団体名) Ki-AI

(所 属) 株式会社竹中工務店

東京本店設計部第4部門



優秀賞：軒下に広がるまち

行藤将之亮

(所 属) 京都府立大学

環境学部 環境デザイン学科



優秀賞：鴨川コモンズ

陸曦

(所 属) UDS 株式会社

プロジェクトデザイン事業部

佳 作：繕う 令和期のこうとな京都

谷山陸

(所 属) 株式会社一級建築士事務所設計組織 DNA

佳 作：都市の『山』を貯める

白樺聖

(所 属) 京都芸術大学大学院

佳 作：京都雨庭計画 2025 ～

野瀬匠、玉野奨

(所 属) 株式会社熊谷組

佳 作：おのがじしの園 ―アンビエントの高層化―

金宥祈、北村優汰、ガンメイキ

(団体名) 東アジア

(所 属) 京都精華大学 建築学科



奨励賞：ISAMU MORITA BRIDE KYOTO

北條豊和

(所 属) 一般社団法人環境文化史創造研究所／

株式会社北條建築事務所

奨励賞：暮らしが根づく庭

大町有香子

(所 属) 京都工芸繊維大学

奨励賞：ニワのすゝめ

藤本もも

(所 属) 京都美術工芸大学

奨励賞：たびの ゆくさき のどけし

山中直

(所 属) スナオセツケイシャ北大路

奨励賞：Energy transition

原田大介

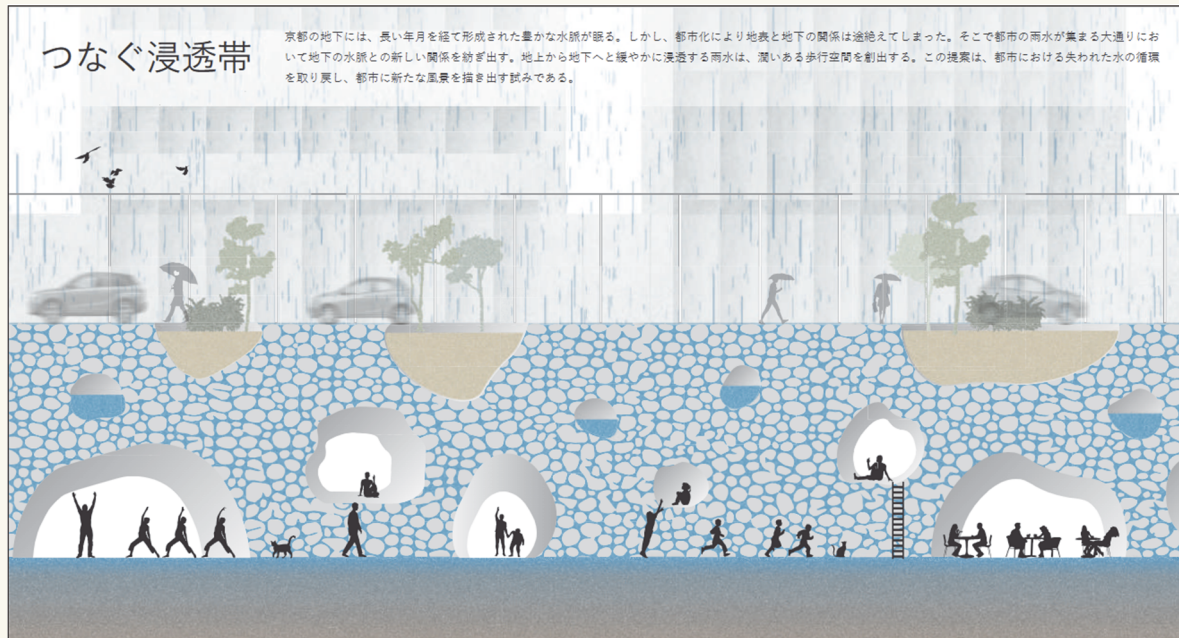


大 賞：つなぐ浸透帯

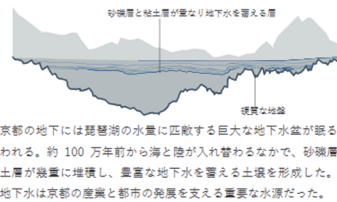
菊地佑磨、伊藤光佑、青木麻緒

(団体名) Ki-AI

(所 属) 株式会社竹中工務店 東京本店設計部第4 部門
東京都江東区

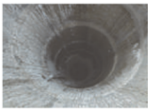


-1 地下水によって発展した京都



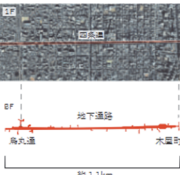
京都の地下には琵琶湖の水量に匹敵する巨大な地下水盆地があると言われる。約 100 万年前から海と陸が入り替わるなかで、砂礫層と粘土層が堆積し、豊富な地下水を蓄える土壌を形成した。この地下水は京都の産業と都市の発展を支える重要な水源だった。

-2 都市化による水の循環の断絶



都市化による地表のコンクリート化は水循環を阻害し、京都の各地では井戸枯れを引き起こしている。地下水は都市の共有財産であり、その保全と活用は持続可能な都市づくりの重要課題となっている。

-3 敷地 四条通地下道



対象敷地である四条通地下道は 1963 年に開通し、角丸通から水屋町まで約 1.1km を結ぶ。地上の混雑を避けるための通路だったが、現在は単なる通過空間となり、四条通の真下であるという好立地のポテンシャルは活かされていないのが、現状である。

地上の様子



停車と歩行の機能を維持しながら、都市に水循環をもたらす浸透帯。夏季は貯留水の気化熱により歩行空間を涼やかに保ち、点在する植栽が保水機能を高め、街に緑を育む。

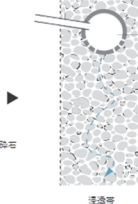
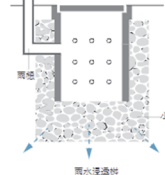
-4 雨水が集中する路面の地下



都市に降った雨水の多くは道路に集中する。ビルの雨水は建物を通って雨水貯留タンクへ、道路の雨水は側溝へと流れ込み、これらは下水道へと放出される。当該敷地では、地下街の存在により雨水が地中に浸透できず、地表と地下の自然な水循環が断絶されてしまっている。

-5 雨水浸透の仕組み

そこで地下の水循環を取り戻すため、雨水浸透の原理を応用した建築を提案する。この仕組みは、雨水を一時的に貯留して汚物を除去した後、穴から徐々に放出する。周囲に砕石を配置することで、地中への浸透を緩やかにコントロールする。これを発展させ、雨水が集中する道路から地下空間を貫通する浸透帯を設置することで、都市の水循環との接点を作る。

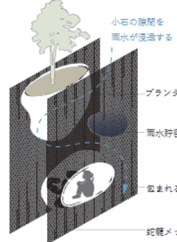


地下の様子



浸透帯に沿って大小の空間が連なり、多様な活動が地下へと広がる。かつての無機質な通路は、人々の賑わいに満ちた豊かな公共空間へと生まれ変わる。

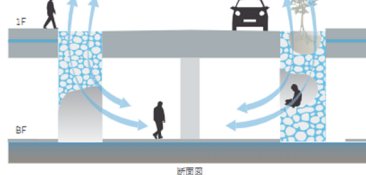
-6 石の中の空間



浸透帯の砕石の隙間に、石の形状をした空間ユニットを設置する。この形状により、蛇籠に敷き詰められた小石と共に雨水を円滑に地下へと誘導する。地上部はプランター、埋め込まれた部分は雨水貯留のタンク、地下で現れる部分は曲面の包まれるような部屋となり、雨水の熱容量により夏は涼しく、冬は温度の安定した快適な環境を作り出す。

-7 都市と大地をつなぐ浸透帯

停車帯として使用される一車線分のスペースに、道路排水機能を備えた浸透帯を設置する。道路に集まる雨水を地中へと緩やかに浸透させることで、都市の水循環を再生する。さらに、貯留水の気化熱により地上部の夏季温度を低減し、快適な憩いの空間として人々が集える地下空間を創出する新たな都市インフラを実現する。



断面図

優秀賞：軒下に広がるまち

行藤将之亮

(所 属) 京都府立大学 環境学部 環境デザイン学科

大阪府羽曳野市



軒下に広がるまち

京都の町並みは、軒の高さが揃った京町家が連なり、軒先での高い交流によって独自の魅力を築いてきた。しかし、空き家の増加や観光都市化、自動車優先の道路環境により、その活気が失われつつある。本提案では、軒下空間を大胆に再編し、交流と賑わいを取り戻す町並みを創造する。建物の一部を開放し、軒下を広げることで、歩行者が滞在できる半屋外空間を形成。解体と再生による新たな軒下が、人と都市のつながりを再構築する。

1. 観光客中心の都市化

京都市では、観光産業の発達と共に観光客中心の都市化が進んでいる。その結果、地元住民の生活空間が狭小している。また、自動車優先の道路環境により、自転車や歩行者の居場所や軒先での活気が失われつつある。



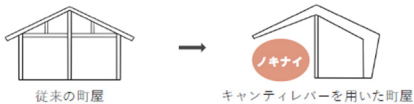
2. 軒下空間の再編

軒下空間の拡大する事で、通路と半屋外空間が、地元住民と観光客の新たな交流と日常が生まれる。京都市における空き家問題は細街路が多く存在する地区で深刻であり、そうした空き家エリアの建築に軒下空間の再編を行う。



3. 「ノキナイ」

キャンティレバーを用いることで、町家の半分が軒となる。その下の部分には、外と内が融合した新たな空間である「ノキナイ」が生まれ、軒下の開放感と屋内の快適性が一体となった、有機的空間を創出する。



4. ノキナイ×道路

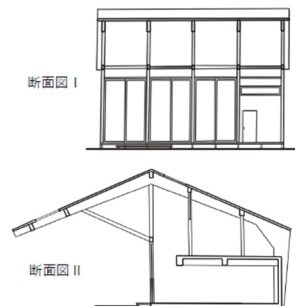
ノキナイによって歩行者の居場所が確保される。その結果、細街路は自動車・歩行者・自転車など全てを許容する豊かな広場へと変化する。多様な目的と手段で人々は居合わせ、新しいコミュニティと日常を生み出す。



模型写真Ⅰ：建築



模型写真Ⅱ：まち並み



未来の京都 建築デザインコンペ2024

優秀賞：鴨川 commons

陸 暲

(所 属) UDS 株式会社 プロジェクトデザイン事業部

東京都杉並区



KAMOGAWA COMMONS 鴨川 commons - 未来の京都の新しい都市軸

今の京都では、オーバーツーリズムの問題が起きている。公共交通機関の混雑、私有地への無断立ち入りなどで、京都の街並みの原風景が壊れる懸念が生じた。京都の街並みの原風景を守るため、未来の鴨川沿いに、観光シーズンに限定しての仮設建築「鴨川 commons」を提案する。「鴨川 commons」は鴨川沿いにある京都の夏の風物詩「納涼床」のように、観光シーズンに合わせて設置される。京都市民の人口の減少や空き家は問題となる一方、日本全国や世界から来る京都の大学生は多く、未来の京都を担うのは京都市民だけではなく、京都に来る大学生たちでもある。本提案の「鴨川 commons」という仮設の建築空間に、京都市民と大学生たちはすだれを自由に調節することで、交流の場や学ぶの場、展示スペースを作る。「鴨川 commons」で、京都市民、京都に住む大学生はイベントや講座（京都の歴史文化）を開き、混雑で困っている観光客は徒歩で「鴨川 commons」にアクセスでき、イベントや講座で京都市民や大学生と自由にコミュニケーションをとれる。「鴨川 commons」は未来の京都にある重要な機能を担うブリックスペースであり、京都地元の住民と京都に来る大学生や観光客の友情を築く場所である一方、京都から世界に向けて発信する舞台となり、未来の京都の新しい都市軸となる。

未来の「鴨川 commons」



川端通側、三条通～四条通区間。観光シーズンに近辺の観光名所の混雑を解消するため、観光客の流れを「鴨川 commons」というコミュニケーションの場へ誘う



京都市立大学×観光客のコミュニケーションの場（案内、レクチャー、展示）

川端通側、「鴨川 commons」はだれでも気軽に立ち寄ることができる緑地となり、奥の屋根の下にすだれの調節によって交流スペースがつけれる



三条通～四条通区間では、川向う側の京都の夏の風物詩「納涼床」を眺めることができ、「鴨川 commons」は「納涼床」とつながり、まるで絵巻物に描かれていた光景

鴨川側、「鴨川 commons」は対岸の景色を眺望できるテラスとなり、京都市民、大学生、観光客は最先端の AR グラスを利用して、過去の京都と未来の京都を展望できる



未来の京都 建築デザインコンペ2024

佳作：繕う 令和期のこうとな京都
谷山陸

(所 属) 株式会社一級建築士事務所設計組織 DNA
京都市

つくるう 繕う 令和期のこうとな京都

京都の町家は常に変化を続けていたが、昭和～令和にかけてその変遷が途絶えた。既存の姿を残し、後世に伝える保存の意識が高まっている。保存・活用することが重要であることは言うまでもないが、令和期においては京町家の姿があっても良いのではないだろうか。これは地味な提案に相違ない。調査を行った町家・空家を対象にした。令和期における町家の姿をケーススタディした仮想プロジェクトである。このプロジェクトは既存建屋の活用可能性を拡張する提案である。

京町家の変遷を継ぐ

江戸期 民家はなるべく低く建てられていた
→ 明治前期 棟を這側に高くし、厨子二階を設ける
→ 明治後期 棟を高くし、厨子の裏にも二階を設ける
→ 昭和前期 棟を奥側に高くして二階建数を設ける
→ 昭和後期 棟を高くし、二階建とする
→ 令和期 現代の多様な暮らしに対応しながら部分的に保存をする、半保存の様な在り方

現代の京都にも継ぐ文化は、人々の精神だけでなく都市計画にも色濃く残っている。景観条例の指導方針や京町家条例の補助対象には、道路面から見えるかどうかで判断基準の1つとなっている。これはこれまでの慣習・実情による、京都の都市形成の顕微鏡である。

case.1 連担案

想定用途：企業社屋

連続建築物制度を活用した道路地再生提案。路地の裏側を半解体し、長屋を繋げる一体的な屋根を覆った。連続的な長屋と既存部を繋げた更迭室や会議室を創る。

case.2 庭屋案

想定用途：一棟貸しの旅館

明治前期に建てられた築100年を超える京町家の改修である。元工場を2ndLivingとした拠点から、浴室を水廻りと捉えた坪敷を計画した新たな旅館一軒をつくる。

case.3 複合案

想定用途：複合施設

明治期の町家が2棟あり、双方奥には残れる2敷地計4棟の再生提案。4棟それぞれからデッキを計画し、トシム・路地から抜け出る異なる用途の使い合う豊かな中庭にたどり着く。

case.4 邸宅案

想定用途：一戸建ての住宅

昭和30年頃に建築された、〇〇荘と称される木造アパートである。4軒をまとめて半改造の一戸建て住宅に再生する。明るい居室とするため、屋根を分割して多様な自然光を取り込む。

case.5 非建築

想定用途：貸し別荘

昭和中期、建築基準法制定以降に建築された建屋を対象に、連続建築物を活用して既存を受けやすい状態を目指した。築年数超過だったため、減築しながら増築とはならない方法で外部に展示棚を計画した。

佳作：京都雨庭計画 2025～
野瀬匠、玉野奨
(所 属) 株式会社熊谷組
東京都新宿区

京都雨庭計画 2025～

～水盆に支えられた古都を守り育む自然の恵み～

古都京都の地下に広がる巨大な水盆。

水盆に溜まる豊富な地下水は古くから京都の生活・文化・伝統・産業・食を支えてきた。それは人類史以上の年月を経て形成された大地の恵みである。

いつしか京都は人が住むために地面を被覆し、水害対策の名のもとに河川を護岸で固めた。雨水たちの水盆への門戸は閉ざされ、地下水は奥深くに沈む。

人工構造物による対症療法的な水害対策のみでは、近年の異常豪雨には太刀打ちできない。

都市に庭園技術「雨庭」を埋蔵してはどうだろうか。

自然との共生は地下水を蓄え、しなやかにまち・ひと・伝統を守り、古都に彩りを与え未来の新しい文化を生み出す礎となっていく。

01. 水盆に支えられてきた京都の歴史

京都水盆は約 211 億トン（琵琶湖の約 80%）もの地下水を保有しており、溜まった地下水は急須のように湧山と天王山の間の山から湧き出てとれ出る。この地下水は生活用水としてはもちろん、伝統・文化・産業・食に至る幅広い範囲で利用され京都の歴史を支えてきた。水盆は特有の地形・地層の条件が揃い形成された大地の恵みである。



地下水を利用した京都の伝統文化

02. 宅地化に伴う水害への脆弱化と地下水枯渇

近代以降、山林・農地の宅地化が急速に進んだことで地表面がアスファルトで覆われ、京都全域として保水能力の低下と雨水の地下浸透量の減少（＝雨水量の増加）が進んでいる。これにより地下水は減少し京都の伝統文化に大きく影響を与えつつある。河川氾濫の危険性が高まり人々の生活を脅かしている。

本提案では、地下水蓄積・水害対策を自然素材の機能を活かして行うとともに、自然環境を鑑みとした新たな京都の未来都市像を提案する。

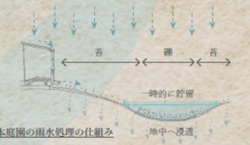


京都市雨水ハザードマップ①

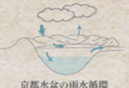
03. 庭園技術「雨庭」に学ぶ

自然素材の機能を活かした雨水処理

日本庭園では古くから、敷地内の雨水を草地や雑草が蓄えられた窪地に集水することで、自然素材の機能を活かし徐々に地中へと浸透させ、排水設備に頼らず雨水処理を行ってきた。この日本庭園の雨水処理方法を現代に応用する。



日本庭園の雨水処理の仕組み



京都水盆の雨水蓄積

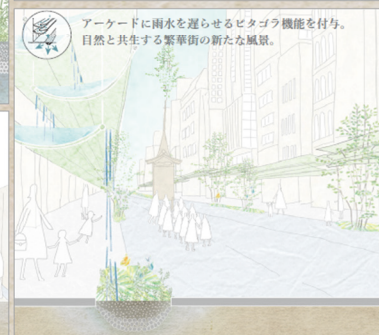
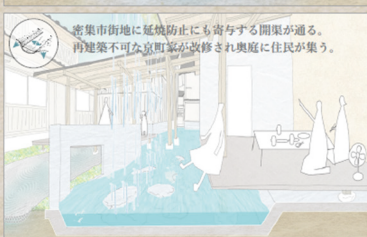
05. 都市のインフラに生命を与え

京都雨庭化により育まれていく古都の新たな未来

無機質な都市インフラに生きた自然素材を挿入することで、自然を媒介とした人や生き物の新たな未来が創り出される。自然と古い街並みが調和する風景、緑化や公園の手入れ等によるコミュニティの形成、生き物の居場所と新たな生態系の創出。そして、人・植物・建物・生き物・大地... 生命が日々循環していく中で、京都水盆と蓄えられた地下水がこれからも京都を支え、新たな文化を生み出す礎となっていく。

04. 「溜め、遅らせ、しみわたらせる」京都を守るオフグリッドな雨庭装置と雨水循環

水の浸透を遅延させるような人工構造物に自然素材の治水浸透装置を挿入する。この装置は、「水を溜め」「水の遅れを遅らせ」「水盆へとしみわたらせる」機能を有する。これらを既存の都市インフラとも共存する形で京都全域に埋め込むことにより、各所で雨水をゆっくりと地中へと浸透させ、豪雨時の河川の急激な増水自体を防ぎ、日頃からゆっくりと地中へと浸透していき、このような京都水盆を含めた雨水循環の仕組みを形成し、原因療法としてのオフグリッドな流域治水を行うとともに、地下水の蓄積へと繋げていく。



佳作：おのがじしの園 -アンビエントの高層化-
金宥祈、北村優汰、ガンメイキ
(団体名) 東アジア
(所 属) 京都精華大学 建築学科
滋賀県大津市

おのがじしの園

- アンビエントの高層化 -



私たちが目指すランドマークとは、その街に建ち続け過去を未来へ継承し続ける建築である。それは、その町とそこに住む人々の軌跡になり歴史が積み重なった目印になる。そんなランドマークを提案したい。

私たちが後世に残してゆきたい空間とは、イメージされる茶室や寺院ではなく京都の持っているアンビエントな部分である。路地やビルの裏側、建築の隙間のような日常に溶け込んだ風景を拾い拡張する。

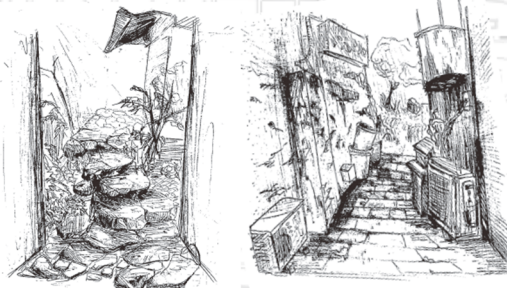
01 設計へのアプローチ

01-1 古都を見直す

ロバート・ベンチューリの「建築の多様性と対立性」に対する解答を和の建築と伝統の視点から再考する。敷地はニデック京都タワービルの跡地。

01-2 建築の多様性と対立性

建築における対立性を考える際の最も重要な現象が外部と内部である。ここでは外部：公的で一般的 内部：私的で特殊な空間とし、それらの空間や用途上の要求が衝突するところに建築が生じ意味を付加していると考え。その時、**物理的事実とその心理的な反応のずれから生じる暖昧さが対立性**だと捉える。



そして、多様性とは外観を見た際に感じる目新しさやジャンルといった目に見えてわかる多様さではなく、建築の「内」に存在する多様さを指していると考え。「多様性と対立性を備えた建築には暖昧さと緊張がつきものである」とロバート・ベンチューリは記しており、私たちは条坊制と庭園の關係にそれをみた。この建築では基盤の目と庭という二つの要素から新しい空間を提案する。

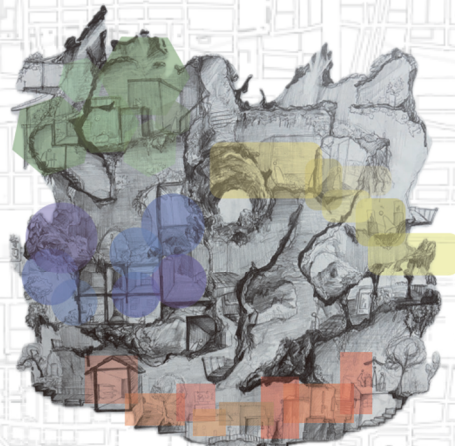
02 都市における自然

02-1 朽ち

一般的に自然と言われ想像される姿は緑の生い茂った草花や木々であろうが、鉄とコンクリートからなる都市においても果たしてそれは当てはまるのだろうか。(緑の自然とはアマゾンのような秘境にあるモノで都市においては当てはまらないと考える。)都市における自然とは錆びひび割れ、劣化といった経年からなる現象だと考える。

02-2 古美 (ふるび) てゆくモノ

寺社仏閣などの古建築が、オリジナルの彩色に補修されると違和感を覚えることがある。朽ちた姿こそ愛でられる。**歴史年代的な歳月を経て建築は古美る。**



断面ダイアグラム

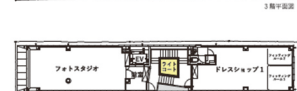
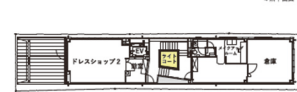
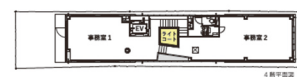
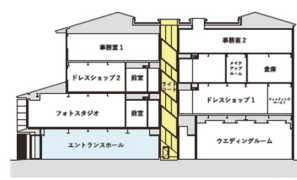
テナント 運営 ギャラリー ゲストハウス

奨励賞：ISAMU MORITA BRIDE KYOTO

北條豊和

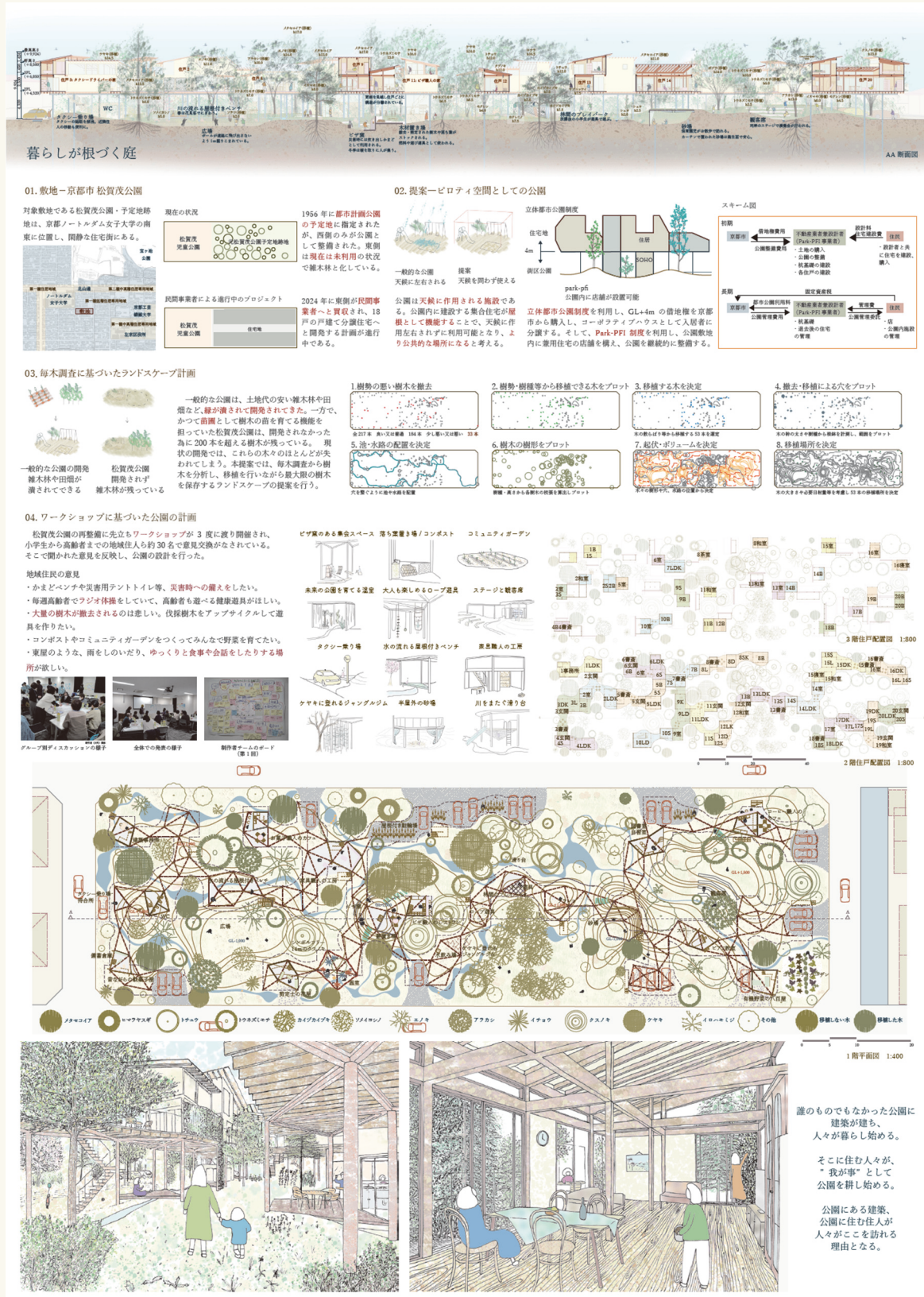
(所 属) 一般社団法人環境文化史創造研究所／株式会社北條建築事務所

大阪府和泉市



未来の京都 建築デザインコンペ2024

奨励賞：暮らしが根づく庭
大町有香子
(所 属) 京都工芸繊維大学
京都市



奨励賞：ニワのすゝめ

藤本もも

(所 属) 京都美術工芸大学

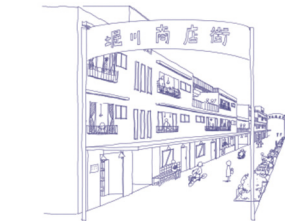
大阪府大阪市

ニワのすゝめ



設計趣旨

人と人の距離を適切に保ちながら、ニワでの生活や住民同士のコミュニティを育む団地。昔のような盛り上がりを取り戻しつつ変わりゆく時代に順応していくような古くも新しさを感じられる団地再生を提案。



3 団地既存のニワ

堀川団地はRC造に町家が組み込まれている建物である。団地内の住戸には通りニワを模したものがあり住戸同士が隣接することにより発生したバルコニーも存在する。昔の堀川団地で交流の手法は2階のバルコニーや屋上で洗濯物を干している人同士がコミュニケーションをとること。



歩道にもお店

団地の前にある歩道は「トビニワ」と名づけた。昔は歩道でも多くのコミュニティが広がっていたため現代で復活させ団地を盛り上げる。

裏の通りのニワ

建物の裏にあるニワは「オクノニワ」と名づけた。メインのカウンターは大通りの反対側に計画。オクノニワから見えるお店は賑わっている。



レストラン内のニワ

建物の内にあるニワは「ヤネアリノニワ」と名づけた。窓を開けると通風を確保でき、レストランに入らなければここに書くことができない。

1 暮らしの中心を団地へもどす

団地が完成した当初堀川団地は街の中心的存在であった。現在はどうかろう。昭和はモノを直接売買する行為自体が街を華やかにすることにつながっていた。しかし近年ではネットショッピングなどが増え、モノを売買する場所を増やすだけでは街を豊かにすることはできないと感じる。団地内で人と人が関わりあうようなサービスを提供できる場所として生まれ変わらせることで、暮らしの中心を団地に戻す。

過去

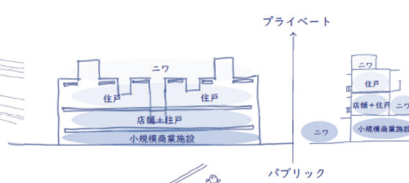


現在



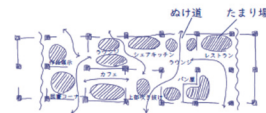
4 “新しい”ニワ

今と昔では交流の頻度も性質も変化してきている。機能を完全に復元しても活かされずにおわる。昔のニワの使い方を参考にこれからの世代でも使える新しいニワを提案。コモンスペースであった空間をさらにプライベートな空間やパブリックな空間へと変化させる。自分だけのニワをつくることで気楽に自分のコミュニティを広げることができる。上下の交流空間に団地を使う人（住人・外務の人）のグラデーションをつけることで完全に空間を分けることがなくなる。



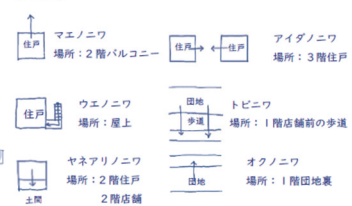
2 日常を共有する

1階はふらっと宿題をやっかえる、すこしだけパソコン作業をやってみるなど、年齢も性別も違う人たちが関わる事ができる空間。路地のような1階の室内空間で生まれたたまり場は新たな時間共有の場となる。固定されたコミュニティが新たに広まる場として2階の習い事室では地域の子供や大人が教えたり教えられるたりすることができ。1日を少しでも多くの人と共有することで生まれる地元愛や仲間意識が地域コミュニティの活性化、再生に繋がる。



5 発生させる6つのニワ

町家を構成する上で大切な要素とされるニワに名前を付け、新しく意味づけを行った。個人でも使うことができるようなマエノニワとして計画。減築することで生まれた空間にはアイダノニワ、住戸の中は半屋外のヤネアリノニワ、個人で使える屋上はウエノニワ、一階の道路側にある商業スペースはトビニワ、裏側の路地空間は裏のニワとして名づけた。



住戸の前のニワ

住戸の前にあるバルコニーには「マエノニワ」と名づけた。住人だけでなく地域の人も利用することができる。ウッドデッキはオープンスペースに。

住戸と住戸の間のニワ

住戸と住戸の間のニワには「アイダノニワ」と名づけた。隣の住人と共同で使うことのできるニワ。階段を昇れば屋上のニワに行くことができる。



一番上のニワ

3階以上のアイダノニワからはぼんやり見えるのは「ウエノニワ」と名づけた。住人だけのみのプライベートスペース。自分のために使うことや他人を招き入れることもできる。

未来の京都 建築デザインコンペ2024

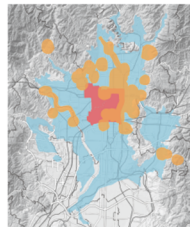
奨励賞：たびの ゆくさき のどけし
山中直
(所 属) スナオセッケイシヤ北大路
京都市

の ゆ た
ど く び
け さ の
し き

京のすきまを活用する
スローコンパクトツーリズム

今や名実ともに世界の古都となった京都。古くからの文化や伝統のみならず、最先端の技術やファッションまでもが集結している。特に近年は国内のみならず外国からの観光客も急増している。
一方、まちが繁栄するのはよろこばしいが、どこか気づわしく感じる人も多くかもしれない。
その中にある、時の流れに取り残されてしまっている人もいないだろうか。例えば要介護高齢者をはじめとして、サポートを必要とする人々はどうだろうか。彼らがまちを旅する姿を見かけるのはまれである。
まちにひそむ“京のすきま”を活かし、旅行者や住民ののんびりゆっくりすごせる京の“行く先”について考えた。

地 京のすきま地域の活用



現在の京都市では、一部の観光地や中心市街地に人口の流入が偏っている状態といえる。

図は、市街化区域において、有名観光地とその周辺を近景デザイン保全区域（京都市眺望景観創生条例）で表し、中心市街地を中央区、下京区の範囲でもって表したものである。

それ以外の部分を京のすきま地域として表した。そして、こうした地域は空き家が多いのが現状である。また、用途地域や地域地区の関係で、商業施設や宿泊施設が設置できない、営業期間が限定されるなどで住宅以外の活用方法がない場所も多い。

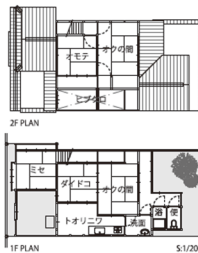
裏返してみれば、混雑をさけてのんびりゆっくりすごすことができ、なおかつ未利用の資源が豊富に存在する地域ともいえる。

宿 空き京町家を活用する
サポート付き宿泊施設の創設

この提案の核となる施設である。在宅介護サービスのように地域のヘルパーステーションから介護スタッフが巡回に訪れる。また、緊急時の呼出に対応する。

CASE STUDY

京のすきま地域において京町家をサポート付き宿泊施設へ改修する。郊外に多くみられる居住を主とした大正時代の仕舞屋敷である。



おもな利用者像



要介護高齢者とその家族
高齢者自身の余暇はもちろん、普段在宅介護をしている家族のレスパイトケア（休息支援）を促進する。



特別支援学校の修学旅行
利用者の年齢は問わない。若年者が安心して民家宿泊体験ができる場とする。

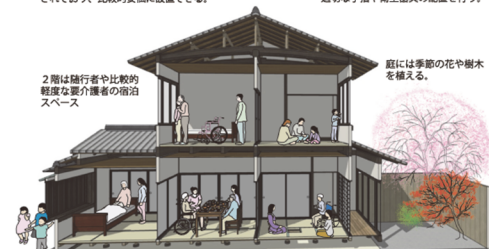


老人ホームやグループホームの旅行者
人生2回目の京都修学旅行は、町家へ宿泊。介護施設の職員も併用して、シームレスな対応を行う。



玄関の段差解消は、手動式も開発されており、比較的安価に設置できる。

浴室は無くトイレを大きくとる。適切な手摺や衛生器具の配置を行う。



2階は旅行者や比較的に軽度な要介護者の宿泊スペース

庭には季節の花や樹木を植える。

格子のある1階の窓際は、ほどよい距離感で外の雰囲気を感じられる場所。外出の困難な人むけの特等席。

畳の部屋があれば、茶道、華道など様々な伝統文化の体験場となる。

援 地域の介護事業所が利用者サポートと宿泊施設の運営を担う。介護技術とホテルの接客技術 二刀流のホスピタリティを提供する。



介護技術および接客技術を相互に高めあい、地域の介護力の向上につなげる。収益事業とすることで、帯域規模の多い地域の介護事業所が、持続的な経営を行えるようになる。

易 少なくとも2人、銭湯は京都市内に約90カ所存在する。重度の要介護者は、より安全に配慮されたサービスを利用する。

銭湯の営業時間
15:00~2:00



午前中〜昼の時間帯を利用し、広い風呂でゆったり入浴する。

すきま時間活用することで、銭湯においても新たな需要を創出する。安全に配慮した手摺を導入するなどして従来の利用客の安定確保も図る。

デイサービスの営業時間
9:00~17:00



夜間の時間帯を利用する。

京には生活機能や文化がコンパクトに集積されているまちが多い。サポート付き宿泊施設は、地域の資源を大いに活用する。旅行者は自らが主体的に移動できる範囲で、様々な体験をする。



古くからの商店街と閑静な住宅街が混在する地域の例。サポート付き宿泊施設の位置は、想定である。

食 本格的な和食や和菓子の店がまちごとに存在する。仕出しの文化で本格的な京料理が家で楽しめる。



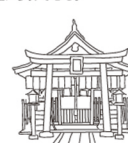
介護用懐石料理など新たな分野を開拓し、地域の住民に対しても質の高い配食サービスを提供する。

文 茶道、華道、書道、香道などの伝統文化を外に出向かなくても気軽に体験できるようにする。



地域の若手茶道家、華道家などの活躍の場を広げる。

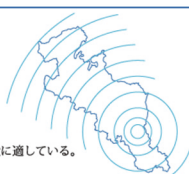
景 全国的に有名でなくても、地元の由緒ある寺社や景勝に至近距離にあり、気軽に参拝できる。



参拝客の増加により、歴史的建造物や行事の保存の機運を高める。

先 さらに先の段階として、京都市全体の京のすきまを活用する。

京都市内を離れてもいたる所に京文化を受け継ぐ町並みや古民家が点在する。山間も自然豊かで市街地とは別の良さもある。また、平面的に広い家も多く、サポート付き宿泊施設に適している。のんびりゆっくりすごせる旅の選択肢を広げて行くことで、新たな旅行者の受け入れ先を創出する。



奨励賞：Energy transition
原田大介
京都市

Energy transition

数百年建ち続く京都の歴史を、現代の生活と結びつけ、これからの未来のための新しい文化の場を生み出す。また、観光客だけでなく、地元の人々も利用し、移動をCO2排出の少ない移動手段を選択し、より良い街とする。

Step 1. Select the locations

Step 2. Connect the locations for mixing

Step 3. Raising ways to circulate energy and people

virtual reality

Technology

culture

ENE transition ways

Station

pedestrian ways

made by solar panel

+6M

CO₂ neutral

e-bus

no car

MIXING

伝統文化、職、サブカルチャー、テクノロジーを融合させて新しい京都カルチャーを生み出し、新たなKyotoを誕生させる。京都では教育機関や観光地が多いから、学生や外国人が多い。新たな文化の担い手として、既存文化やサブカルチャーの融合を彼らに託す。各主要スポットの行き来をより潤滑にしつつ、VR利用も促進し、物理的な移動のみならず次世代の人や文化交流を目指していく。

コンサート会場などでVRを通して海外在住者でも参加できるイベントも開催。

NEW WAYS

歩道や車道の中央分離帯上空約6Mに自転車や電動キックボード専用とした空中経路を設ける。空中経路の舗装は次世代の太陽光パネル敷とし、発電した電気は各拠点に設けた電動キックボード用のステーションで充電を行ったり、夜の街灯などの電力に利用する。

インバウンドの増加で公共交通機関の渋滞や通勤障害がでている問題に対し、移動手段を複数設ける事で交通移動の混雑を緩和させる。

CARBON NEUTRAL

2050年のカーボンニュートラルに向けて次世代の移動手段へと移行していく。建物の高さを出す事や、遺構やコストの関係から地下が優りにくいこの街で歩行者や自転車利用者の移動空間を大きくする。古都で最先端の環境モデル都市として、観光のみならず世界に発信していく。空中経路で発電した電気で電気バスや充電を行ったり、空中経路利用者にはEco-pointなるものを作り観光地や他サービス利用できるものとし、脱炭素社会を目指す。

【伝統・もてなし】

A 嵯峨のまち廻り

B 友禅染

C やきものまち五箇所

D 上七軒

E 花街

F 烏丸

G 錦小路市場

【文化・芸術】

H 上京神社

I 下鴨神社

J 南禅寺

K 西本願寺

L 南禅寺

【のど歌・コンサート会場】

M 南禅寺

N 南禅寺

O 南禅寺

P 南禅寺

【その他】

Q 南禅寺

R 南禅寺

S 南禅寺

T 南禅寺

U 南禅寺

V 南禅寺

W 南禅寺

X 南禅寺

Y 南禅寺

Z 南禅寺

【CO2排出量の大幅な削減】

・自転車、電動キックボードのCO2排出量 22g/km

・乗用車のCO2排出量 271g/km

【空中道路に設置した太陽光パネルによる発電】

・電動キックボードの充電

・夜間時の照明に使う電力

・充電した電力の用途をメンテナンスなどに活用

【空中道路利用にKyoto Eco Pointの発定】

・観光地での商品販売にPointで割引利用

・省スペースもPoint利用できるようにVR事業やネット販売でPoint利用

・Eco Pointを利用しないと受けられない職業体験を計画する

CO₂

大賞 つなぐ浸透帯

審査委員 松本 尚子

京都の地下には、211億トンもの水を蓄える「京都水盆」※と呼ばれる巨大な水資源が存在し、古くからこの都市の文化や生活を静かに支えてきた。本提案は、ふだん意識されることの少ない地中のユニークなインフラストラクチャーに着目し、同じく地下に広がる都市空間である四条通地下道を、単なる移動のための通路ではなく、さまざまな振る舞いを包摂する環境空間として再構築するものである。本提案は、近代以前に存在した環境と暮らしの密接なつながりを、現代の都市空間にふさわしいかたちで再び実現できる可能性を示唆しており、分断されたものの繋ぎ直しという点からも未来への希望を感じさせるものである。

※関西大学教授・楠見晴重による

優秀賞 軒下に広がるまち

審査委員長 平田 晃久

粗削りながらも率直な構想力、という観点で言えば、すべての作品の中でこれが最も印象的だったかもしれない。これまで引き継がれてきた低い軒のラインを引き継ぎながらも、鉄骨のフレームによって大きな無柱軒先空間をつくと街はどう変わるか。ばかばかしいくらい単純な問いだし、その結果何ができるのか説明不足な点もある。しかしここには何か虚をつかれるような魅力がある。作者はそれを誇って良いと思う。ただ、こうした提案を現実にするには、様々なネガティブな要因を乗り越え、提案を鍛え上げる持続力と腕力が求められる。作者の未来に期待したい。

優秀賞 鴨川コモンズ

審査委員 木村 淳子

夏の川床や、等間隔の法則で知られる鴨川の右岸に対し、比較的静かな左岸への仮設建築物の提案。オーバーツーリズムを背景として、観光客が京都の学生と語ることができるヒューマンスケールのコモンズが提案された。観光を促進するのではなく、観光客にひとときの余白を与え、京都について考える時間を提供している点が、京都観光の新しい可能性として提示されていて興味深い。やや規模が大きすぎるという懸念はあるが、ゆっくりとした時間をもたらすプログラムやミニマルな構成により、都市景観としても爽やかな印象で好感が持てる。

総 評

審査委員長 平田 晃久

京都が魅力的な都市であることは、海外を含む多くの訪問者たちが証している。しかしそれに甘んじて変わり続けることを怠れば、京都はいずれ、都市としての活力を失ってしまうだろう。この都市は変わり続けることで京都であり続けてきた。その為には、今ある都市の姿を批評的な眼差しで見直し、どうしたらもっと魅力的なものにできるかを想像する若い力が必要だ。「京都の未来」という課題への応答として期待していたのは、粗削りでも、京都という都市の魅力の前に怖気付くことのない、率直な構想力だ。幸いなことに、そんな自由な精神が感じられる作品が多く寄せられ、審査は楽しいものとなった。京都の地下が琵琶湖とほぼ同量の水脈で満たされていることを、未来の地下空間へと翻訳した最優秀賞作品をはじめ、言われてみれば確かにそうになったら面白いかもしれない、と思わせる多くの作品たちに出会えたからだ。そこにある京都への批評精神の根底に、それぞれの応募者の京都という街への深い愛が感じられたのも印象的だった。

総 評

審査委員 松本 尚子

京都の未来“新しい世界の生まれるところ”というテーマのもと、どのような視点や発想が提示されるのかに期待した。「軒下に広がるまち」は、町家の建築形式に連続性を見出し、軒を起点とした半屋外空間を都市生活者への贈与として提案した。「鴨川コモンズ」は、都市スケールのもたらす爽快感を、身体的な感覚として表現していた。その他にも、異なる時間や速度が交差する都市像、暮らしに寄り添う視点、資源のネットワークの可視化など、多様な視点での提案が見られた。京都の未来を描く行為は、まず京都という都市を多角的に見つめることから始まるのだと思う。現代の都市は、後背地や世界中に広がるモビリティによって構成される広域な領域となり、ますますとえどころのない存在になっている。そうした中で何にリアリティを見出しどのように捉え直すのか。過去から続く街区割や、建築形式を持つこの都市固有の視点から生まれる新しい提案に、今後も期待したい。

総 評

審査委員 木村 淳子

京都の未来をめぐる思いは、さらに多様化したと感じます。観光都市として発展し続けた末のオーバーツーリズム、日々失われていく京町家、低炭素化が求められる都市構造、京都の景観における様々な問題、地域コミュニティ、バリアフリー化など、京都が今まさに直面している課題を切実に捉えながら、ある種思い切りの良い提案に共感しました。一方で、潜在的な京都の魅力を、どのようにしてパブリックスペースに表出させ、成立させるかという提案もとても魅力的でした。地理的背景が京都という都市を育んだことは間違いなく、その自然の恩恵に目を向ける時なのかもしれません。人の数だけ都市像があり、語り尽くせないことが都市の魅力だと思います。京都という都市の未来について考え、議論する場が、このコンペを機に生まれることを楽しみにしています。